

Christopher Simpson 著

『ディヴィジョンヴァイオリン, すなわちグラウンド上の即興演奏技法』
第2版より

第3部 「グラウンド上のディヴィジョンの体系化」(3)

(訳)

菊池可奈子 (本講座大学院博士課程後期在学)	梅比良麻子 (本講座大学院博士課程前期在学)
粟木陽子 (本講座大学院博士課程前期在学)	井内志穂 (本講座大学院博士課程前期在学)
岡田みなみ (本講座大学院博士課程前期在学)	佐藤歩 (本講座大学院博士課程前期在学)
杉原歩 (本講座大学院博士課程前期在学)	済川貴 (本講座大学院博士課程前期在学)
堀田佳苗 (本講座大学院博士課程前期在学)	堀江遥 (本講座大学院博士課程前期在学)
山本千尋 (本講座大学院博士課程前期在学)	千葉潤之介 (本学大学院教育学研究科)

Christopher Simpson

The Division-Viol, or, The Art of PLAYING Ex tempore upon a GROUND. EDITIO SECVNDA
Part III “The Method of ordering Division to a Ground” (3)
(Japanese Translation)

Kanako KIKUCHI	Asako UMEHIRA
Yoko AWAKI	Shiho INOUCHI
Minami OKADA	Ayumi SATO
Ayumi SUGIHARA	Takashi SUMIKAWA
Kanae HOTTA	Haruka HORIE
Chihiro YAMAMOTO	Junnosuke CHIBA

§ 13. 持続するグラウンドについて

ディヴィジョンをその上で演奏したり作曲¹したりするために使用される持続するグラウンド Continued Ground は、(通例) その目的のために提示されたり選択されたりするモテットまたはマドリガルの通奏低音 Through-Bass である。これを行う場合、オルガン奏者にテンポ感を知らせるために、2つまたは3つの単純な全音符を弾いた後で、自分の好みや前に説明したことに従って分割し始め、終止形または終止の近くに来るまで続けなさい。終止のところでは、ある程度手の敏捷さを示すようにする。そこでは、もしそうしたければ、グラウンドの演奏をそのまま続けさせながら、二分音符を1つか2つ、あ

¹ 原文は Making。

るいは3つ分休止してもよい。それから、何らかの音型を加え、その後で、ディスカント〔・ディヴィジョン〕、ミクス・ディヴィジョン、トリブラ等、好きなものに取りかかる。このようにして、音符を時には速く、時にはゆるやかに弾き、もっとも効率良く多様性を生み出すために、あるディヴィジョンから他のディヴィジョンへと変化させて、残りのグラウンドを続けなさい。また、もし自分が他の人よりも優れた何かを持っているのであれば、〔それを〕終結部分のために取っておくようにする。

§ 14. 1挺のヴァイオリンによるグラウンド上のディヴィジョンの作曲について

グラウンド上のディヴィジョンを作曲する際は、技術的な負担を少なくするよう努めなさい。というのも、音楽面において等しく優れた楽曲の中では、常に、より負担なく演奏できるものが望まれているからである。それゆえ、この楽器のネック²とそれに付随する運指法を知らない限り、（どんなに偉大な音楽家であろうとも）グラウンド上のディヴィジョンを上手く作曲できないと断言できる。

これが1挺のヴァイオリンのためのディヴィジョンに関して述べなければならないことのすべてである。これ以上は、他の人たちがグラウンド上に作曲したディヴィジョンを精読するようにしなさい。たとえばヘンリー・パトラー Henry Butler 氏、ダニエル・ノークム Daniel Norcome 氏、その他何人かの（これまでに）この特定の楽器に卓越したわが国の優れた人々の作品である。彼らのディヴィジョンの中でもっとも模倣される価値があるものを見つけて、観察し、書きとめるとよい。

§ 15. グラウンド上で2挺のヴァイオリンが即興で同時に演奏することについて

1挺のヴァイオリンのためのディヴィジョンに関するこの説明のあとで、2挺のヴァイオリンをグラウンド上で同時に演奏することについていくらか述べることは、時宜を得ているであろう。この種の音楽に関して筆者には経験に基づく知識がある。それゆえに、上達はさらなる経験に帰するとしても、〔ここでは〕筆者が習得してきたような順序と方法で述べることにしよう。

まず、グラウンドを3枚の別々の譜面上に記す。1枚はオルガンまたはハーブシコード奏者のため、残りの2枚はヴァイオリンを弾く2人のためのものである。ここでは、順序よくまた分かりやすくするために、3つの文字で区別することにする。すなわち、Aはオルガン奏者、Bは第1バス、Cは第2バスである。

これらそれぞれの奏者が同じグラウンドを前に置き、3人とも同時に〔弾き〕始める。AとBはグラウンドを弾き、Cはゆっくりした音符、すなわち音楽の開始に適するようなディスカントを弾く。これを済ませたら、Cがグラウンドを弾き、Bは、今Cが終えたのと同様に、ただし、いくらか変奏を加えてディスカントを弾く。もし、グラウンドが2つの楽節で構成されているなら、第2節でも同様のことを行う。つまり、一方のヴァイオリンがグラウンド上でディスカントまたは分割を弾いている間は、もう一方は常にグラウンドを弾くのである。

このようにグラウンドを弾いたら、再びCは、より速い動きのディヴィジョンを1節弾き始める。それが終わったら、Bは〔Cの旋律と〕似た別のもの、ただし、多少とも高尚な旋律³で同じように応答させる。〔BとCの〕技量や着想に少しでも違いがある場合は、よりよい演奏のためにも、着想に優れた者を先導させ、技量に優れた者を後続させる方がよい。そうすれば、音楽が停滞⁴したり〔価値が〕減少したりするのではなく、むしろ、演奏〔の価値〕が増大するように見えるであろう。

このようにしてヴァイオリンが（いわば）次々に競い合っているとき、もしAが手の能力を持っているのであれば、与えられた合図に基づいて、自らのディヴィジョンを一節加える。そのとき2挺のヴァイオリンのうち一方がグラウンドを、もう一方はゆっくりしたディスカントを弾く。Aが自分の楽節を弾き終えたら、はじめに1挺のヴァイオリン、次いでもう1挺のヴァイオリンによってこれへの応答が作られる。

同じ方法で適当だと考える長さで互いに応答し合ったら、〔次に〕2挺のヴァイオリンは同時に一節を分割する。これを行うとき、Bは上または下のオクターブに動いて、そこから自分の音符に戻ったりユニゾンかオクターブで次の音符に出会ったりしてグラウンドを分割する。この方法によって、CはBの動きを知ることになるので、同じになってしまうのをどう避ければよいかもわかるのである。したがって、3

² 弦楽器の棹の部分。

³ 原文は Ayre。

⁴ 原文は slaccess。

度または5度（必要であれば6度）になるように、終止に至るまで、各々後続する音符に前述の協和音のいずれかで出会うように進行するのである。終止では、（掛留音の分割のあとで）終止音にオクターブで出会うようにする。この指示を正しく守り、2挺のヴァイオリンは5度や8度の連続という目立った不協和を起ささないようにして、その楽節全体をと共に即興で動き回る。

このようにしてしばらく進んだら、Cは二全音符か全音符の音価でディヴィジョンの何らかの音型を始める。先程も述べたように、これによってBはCの意図を知ることができるのである。これが終わったら、Bは同じ長さで後続する音符の上で同様に応答する。このようにして次々に好きなだけ行いなさい。これが行われたら、異なる音価の何か別の音型に進むのである。それは新しい変化を生み出すであろう。

この二全音符、全音符、または二分音符による競演が終わったら、もしAが（前述したように）手の能力を持っている場合は、彼に合図を送り、BとCが互いに行ってきたように、Aも自分の音型を始める。その音型には、ヴァイオリンが一人または二人で応答する。もし二人で応答する場合は、前述したように、同時に分割するときの指示に従って行われなければならない。分割を行う声部はいつでも一番よく聴こえなければならないので、オルガン奏者が分割している間、[BとCは]常にゆっくりと柔らかな音符を演奏するように。

これが終わったら、2人のヴァイオリン奏者は、ともにもう一節を速い音符かゆっくりとした音符で好きなように弾く。もし音楽がまだ十分な長さに紡ぎ出されていないのであれば、トリプラなどの分割音⁵を演奏し始め、楽節全体または一部分のどちらかで互いに応答する。その後、ともに激しい速いディヴィジョンの楽節につなげる。これで終わってもよいし、そうでなければ、時と場合にもっともふさわしいように、ゆっくりとした甘美な音符の一節で終えてもよい。

筆者の経験では、この種の即興音楽は、時に、（ともに弾くことに慣れた人達によって演奏されると）、非常に入念に作曲されたディヴィジョンよりも、より大きな賞賛を勝ち取ることができるものである。

§ 16. 2つまたは3つの声部からなるディヴィジョンの作曲について

2挺のバス

2挺のバス・ヴァイオリンのためのディヴィジョンの作曲では、前述した方法に従いなさい。[つまり]時にはこの声部、時には他の声部を上や下に動かして作り、また時には一方から他方へ音型で応答し、時にはともにディヴィジョンに加わるのである。最良の変化を生み出すように、時にはゆっくりと、時には速い動きにするように。しかし、音型で互いに応答した後は、常に、両方で何か高尚なディヴィジョンを一節加えるとよい。これをもって作曲を終結させるか、あるいは、何かゆっくりとした心地よいディスカントをもって終結させなさい。

2挺のトレブル

2挺のトレブル [・ヴァイオリン] のためのディヴィジョンを作曲する際は、その両方ともグラウンド上でディスカントを作る方法によらなければならない。したがって、(グラウンドも考慮に入れば)作曲は、3つの異なる声部でなされる。両方のトレブルがともに動く時、もっとも自然な進行は、一方が他方に対して3度の音程関係をもつことである。時には6度または他の協和音を混合するが、依然、グラウンドとの[音程]関係は保つ。両者が互いに音型で応答すること、また多様性のためにそれぞれ動きや変化をつけることに関しては、先に述べたことと同様である。

トレブルとバス

1挺のトレブルとバスのために作曲する際は、両声部の性質と音域を考慮し、それに従ってディヴィジョンを組み立てなければならない。つまり、上声部はディスカント [ディヴィジョン] とし、低声部ではグラウンドの分割をより多く行う。

⁵ 原文は *Tripla's and Proportion*。

2挺のトレブルと1挺のバス、2挺のバスと1挺のトレブル

2挺のトレブルと1挺のバス、または2挺のバスと1挺のトレブルのための作曲でも、声部の性質への同様の配慮がなされなければならない。

3挺のバス

3挺のバスのために作られたディヴィジョンにおいては、すべてのヴァイオルがトレブル、バス、内声部を代わる代わる演じる。しかしここで注意すべきことは、3声部のディヴィジョンが、通常、グラウンド上ではなく、むしろファンシー Fancies の方法で作曲されるということである。つまり、通例、フーガで始まり、ディヴィジョンの音型に至って互いに応答し合う。時には2声部対1声部で、時には全声部が一斉にディヴィジョンの競演を行う。しかし、(結局は)たいいてい、荘重かつ和声的な音楽で終止する。

しかし、もしそれぞれのファンシーのあとにエア(それは心地よい変化を生みだすものだが)が続くのであれば、これら2つの短い楽節からなるそのバスは、グラウンドのもつ本質と大して違わない。これらのエアまたはアルメイン Almains は、別のコンソート曲のエアと同様に始まり、そのあとで、前述したように、一方の声部が他方に応答し、また時にはともにディヴィジョンに加わって〔各〕楽節が種々の変奏で繰り返されるのである。

これら2声部と3声部のディヴィジョンのいくつかの種類については、筆者自身、他の一層優れた人々の中に混じって種々の作曲を行ってきているが、それらは、たぶん若い音楽家にとって、模倣や練習に役立つであろう。しかし、(本書での譜例の図版で経験したことだが)ディヴィジョンの印刷にかかる経費が、こうした種類の音楽を伝達しにくくしてしまっている。それでも、この種の〔音楽の〕書写をどうしても望むなら(これは、こうした同様の音楽の作曲をしようという者にはもっとも必要なことであるが)、あらゆる種類の現代的音楽において、つとに有名でもっとも優れた作曲家であるジョン・ジェンキンス John Jenkins 氏ほど、この種の音楽でこれほど多くのことをなしてきた人はいない。ここで、(それが筆者の意図から逸脱することではないだろうから)わが王国における何人かの卓越した人物に言及しておくが、彼らは、様々な優れた作品とりわけ器楽曲において音楽における卓越性を高く評価されてきた〔他の〕諸国民たちを、(私見では)はるかに凌いでいる。もっとも、彼らは自身の作品によって十分に著名であり尊敬もされているので、名前を挙げることはほとんど意味がないであろう。したがって、〔敢えて〕特定の人物を名指しすることはしないし、〔それは〕今論述を終えた特殊な主題であるディヴィジョン音楽の考察に必要なことでもない。

訳者あとがき

本訳稿は Christopher Simpson (1605頃-1669) 著 *The Division-Viol, or, The Art of PLAYING Ex tempore upon a GROUND. DIVIDED INTO THREE PARTS. EDITIO SECVNDA*, London, 1665 の Part III “The Method of ordering Division to a Ground” より §13 ~ §16 (pp.57-61) の全訳である。少なくとも本文の訳出はこれをもって完了したことになる(「まえがき」「献辞」等は未訳出)。訳文中にある()は原文中に実在する補記であり、訳者による補記は〔 〕で明示した。脚注はすべて訳注である。なお、訳出に当たって使用した底本は、1970年前後にロンドンの J.CURWEN & SONS LTD から出版されたファクシミリ版である。